

6年国語 一枚指導案集 「海のいのち」立松和平作

⑥場面「ある日、母は～興味を持てなかった。」

本時の目標

- ・母にとっての海の存在を理解しながら、父が死んだ瀬を自分の世界にしていく太一の様子を読み取る。
- ・父の海にやってきた太一が瀬にもぐり続けた意味を考えながら、太一が漁師としてどのような生活を送っているのかを考える。

発問・指示等	児童の応答予想	教師の組織と対応(タクト)
<p>全てをさとした太一は与吉じいさに何と声をかけましたか。</p> <p>太一は自然な気持ちで何が出来たのですか。</p> <p>⑥場面を読んでください</p> <p>新しい登場人物…誰が出てきますか。</p> <p>母はある日、どんなふうに言いましたか。</p> <p>夜もねむれないほど何が心配なんですか。</p>	<p>「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」</p> <p>顔の前に両手を合わせる事が出来た。与吉じいさのめい福を祈れた。与吉じいさの死を受け入れられた。父が死んだときは自然ではなかった。まだ子どもだったから、ショックが大きかった。父の死も海へ帰っていったと考えられるようになった。いのちは海から生まれてきたから、亡くなった人は海へ帰ると考えている。</p> <p>場面がこれまでに比べ少し長いので前半と後半分けて多くの児童に音読の機会をつくる。</p> <p>太一の母</p> <p>「お前がおとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言い出すかと思うと、私はおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」</p> <p>おとうの死んだ瀬にもぐるといつ言い出すかが心配。</p> <p>太一がおとうを倒したクエをねらうのではないか。</p> <p>おとうと同じようにクエに挑んで太一までが死んでしまうのではないか。</p> <p>太一がおとうの敵をとりたいたいと考え始めるのではないか。</p> <p>おとうだけでなく太一まで失うのは、あまりにも悲しすぎる。</p>	<p>教師の組織と対応(タクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・両手を合わせるといことは？</li> <li>・「今の太一は」と書いてあるいつの太一は自然ではなかったの？</li> <li>・今は父の死に対しても…</li> <li>・自分から音読にチャレンジしようとする姿勢を評価する。(AH,WK,HMに期待)</li> <li>・やる気を感じる具体的な評価をしながら指名するように心がける。</li> <li>・ひとり一人の音読の様子に評価を入れる。</li> </ul> <p>なぜこのことが心配なのか、太一の母が考えていることをみんなで確かめたい。</p> <p>できるだけ多くの子どもたちから母の心情に寄り添わせたいところなので、発言のひとつ一つにうなずいて評価・同意しながらつなぎ言葉で発言をうながしていく。「うんうん、それで…」「なるほど、だから…」など</p>

発問・指示等	児童の応答予想	教師の組織と対応(タクト)
<p>太一はどんな若者になっていたのですか。</p> <p>母の見ている海と太一にとっての海を比べてみましょう。</p> <p>自由な世界でどんな漁の様子ですか。</p> <p>太一が感じた海の様子が書かれているところに線を引きましょう。</p> <p>太一はどこにやって来たのですか。</p> <p>なぜ来たかったのかを考えてみたいと思いますか…</p> <p>太一が瀬にもぐり続けてどれくらい過ぎましたか。</p> <p>もぐり続けている瀬には何がいたのですか。</p> <p>太一の仕事はなんですか。</p> <p>どんな一本釣り漁師になっているのですか。</p> <p>⑦場面の予告 追い求めているうちに～またうかんでいく。</p>	<p>あらしさえもはね返す屈強な若者。 ひょっとしたらクエに挑めるかもしれないくらいの強さを身につけた。 母には心配のもとになる海。 太一には自由な世界。</p> <p>一本づりで20ぴきのイサキをはやばやととる。 父が死んだあたりの瀬に船を進める。 いかりを下ろして海に飛び込んだ。</p> <p>はだに水の感触がこちよいい。 海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。 壮大な音楽を聞いているような気分。 父の海 とうとう父の海にやってきた。 長い間来たいと思っていた。</p> <p>ほぼ一年が過ぎた。</p> <p>アワビもサザエもウニもたくさんいた。 父を最後にもぐり漁師がいなくなっから。 20キロぐらいのクエも見かけた。 だが、太一は興味を持てなかった。 アワビもサザエもウニも20キロぐらいのクエも太一はとらなかった。 興味を持てなかった。</p> <p>一本づり漁師</p> <p>与吉じいさのような一本づり漁師 千びきに一ぴきとればいいという一本づり漁師。 海に育てられていると考える一本づり漁師。</p>	<p>• 太一の肉体的、精神的な成長があったからこそその母の心配であることを確認する。</p> <p>• 「とうとう」という表現からわかることを確かめる。</p> <p>• たくさんいた訳についてつけたし、理由づけを求める。</p> <p>• この発言が続いてこない時は、アワビやサザエやウニに20キロぐらいのクエを太一はとりましたかと返していく。</p> <p>※太一が「興味を持てなかった」訳として… ①父を倒したような大物のクエにしか興味がなかった。 ②一本づり漁師として生きていっているのもぐり漁師として漁をするつもりがない。 2点があることを子どもたち自身の考えとして気づかせていきたい。</p> <p>• 海に育てられているという表現は児童からは出てきにくいと考えられるので、教師の方で補足するようにする。</p>